



第45回——ホータツリーズム

豊田直巳

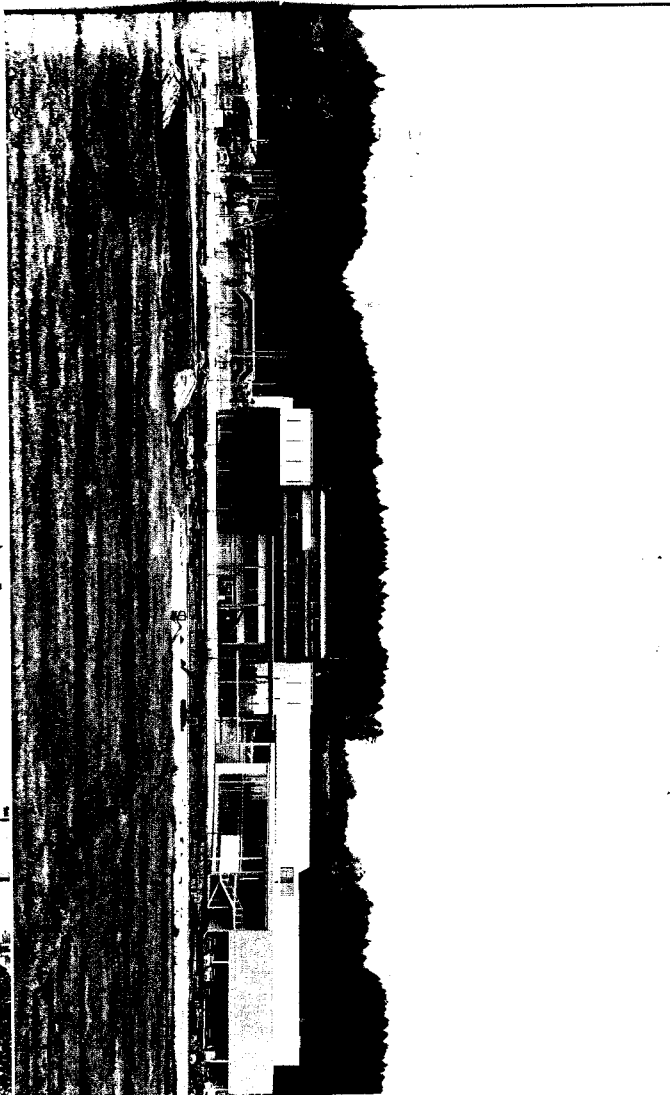
とよだ なおき フォトジャーナリスト

9月20日に双葉町に開館した福島県の東日本大震災・原子力災害伝承館。入館一番乗りは、順番待ちの最前列に立って、双葉町伝説のたるまを高村昇館長(はむら かつたか)からプレゼントされた男性ではなかった。「ソーシヤルデザインスタンス」として開館を待つ一般客の列をよそに、県の観光交流課職員の見導で入館したのは、千葉県館山市の高校生たちだった。彼女たちが手に下げたお揃いのエコバッグには「福が満開 福のしま 福島県ホータツリーズム」と大きく印刷されていた。

このホータツリーズムを実施しているのは、資本金・基金の54%を県が出資する公益財団法人福島県観光物産交流協会。そのホームページには「ありのままの姿 “光” と “影” 見る」「福島の「想い」を聞く」とある。しかし、ホータツリーズムで「ありのままの姿」「福島の「想い」を知ることはできるのだろうか。

たとえば同財団には東京電力や東北電力も各2.2%(2018年度)を出資している。そんなこともあってか、高校生たちが一番乗りした伝承館で、語り部たちは自由に「想い」を語ることが封じられていた。原発事故の責任問題について語ることは許されなかった。

伝承館の指定管理者から「特定の団体、個人または他施設への批判」をしないよう求めるマニュアルを渡されていたのだ。マニュアルの存在が明らかなのは開館後の9月23日だった。



①—伝承館から約1.5kmの場所に掲げられていたが、原発事故後に撤去された「原子力 明るい未来のエネルギー」の原発推進PR看板を島の遺産として展示してほしいと高村昇館長に訴える、看板の標語を考案した大沼勇治さん(中央、本誌2017年6月号本連載第3回参照)。

②—伝承館の外にこそ、福島の「ありのままの姿」が残されている。左手奥に福島第一原発の排気塔やクレーン。その手前に中間貯蔵されるフレコンバッグの山。その右手は、誰も住んでいない双葉町に新しく建設された双葉町産業交流センター。その右手奥の白い屋根は中間貯蔵施設の一部。その右手前が東日本大震災・原子力災害伝承館。

③—今春に町の約4%が避難指示が解除された双葉町に、初めて子どもたちを連れて来館した大沼勇治さんは、PR看板のあった場所ですごしたとヒートルズの真似をした。

④—ホータツリーズムの青いエコバッグを下げて一番乗りした千葉県の高校生と開館を取材するワズメディアのカメラ。(写真③は2020年9月19日撮影、他は同月20日撮影)

